

統括的展望

寺西 基之

2024年の音楽界は前年からの流れを受けて、総じてコロナ禍での停滞を取り戻そうとするかのような活発な様相を呈した。演奏会の中止や変更はほとんどなくなり、コロナ禍で見送られたプログラムや企画を復活させた例が少なからず見受けられた。特に東京では同じ日にいくつもの演奏会が重なるなどの活況ぶり、完売公演も結構多く、一見したところコロナ前の状態に戻ったかのようではある。しかし一方で地方では客足が戻るのが遅れているところもあるというように回復にはばらつきがみられ、コロナのもたらした影響はまだまだ尾を引いている。またせっかくコロナ禍から脱したにもかかわらず、内外の諸情勢のもとでの様々な物価の上昇や円安などにより諸経費がかさむようになって、チケット代を値上げせずにはいられなくなるなど、今後に向けていろいろ懸念材料が生じている。

とりわけ海外のオーケストラやオペラの来日公演にはチケット代の高騰が顕著に現われた。11月は前年同様に様々な海外の名門オーケストラの来日ラッシュとなったが、それらの東京公演のS席をみると、アンドリス・ネルソンス指揮のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団が45,000円、トゥガン・ソビエフ指揮のミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団が34,000円、サイモン・ラトル指揮のバイエルン放送交響楽団が36,000円という高さであった。もっともこれほどの高価格であったにもかかわらず、売れ行きはかなり好調だったようだが、ある招聘元の担当者は「コロナで海外オーケストラの来日が途絶えたことで今は多少無理してでも買って聴きたいという人が多かったと思うが、今後はこのチケット価格では売れなくなってくるのではないかと。といっても今の円安や航空運賃ではこの価格でも採算がとれないので頭が痛い」とその胸の内を明かしてくれた。より規模の大きいオペラ団体となるとさらに問題が大きく、6月に来日したアントニオ・パッパーノ指揮のロイヤル・オペラは実際にS席が72,000円となったが、主催者はその販売にあたって「日本に居ながらにして、ロンドンと同じ舞台を体験してもらいたいから、この時期、どうしてもコストが増大しています。入場料金の上昇に関しご理解をお願いします」と表明し、「極度の円安、航空運賃や海上輸送費、ホテル代の高騰など、オペラ引越し公演にとって猛烈な逆風の中でも、何とか我が国の劇場文化を豊かにし、観客に感動を与え、生活の潤いや生きる糧となってきた引越し公演の伝統を絶やさないため」と、その理由を付記している。招聘元の置かれている苦しい現状がここに吐露されているといえる。コロナ前に比べて特に海外のオペラ団体の来日公演が激減しているのも無理からぬことといえよう。

もちろん国内の団体や演奏会のチケットも上がっている。定期演奏会などの価格をなんとか頑張って据え置きしてきたオーケストラも、今後は値上げせざるを得ないところが多いようだ。またオーケストラやオペラ団体にとってコロナ禍での支えとなっていたキャラバン事業など国の大規模な支援も縮小され、民間から大きな助成を受けるのもなかなか難しくなるなど、財政的に様々な課題を抱えている。

このようにアフター・コロナの時代になってまた新たな問題に直面している音楽界ではあるが、逆にみればそうした中であっても、以下概観するように2024年もきわめて優れた企画や意欲的な活動が様々なみられたことは喜ばしいといえるだろう。

オーケストラ界の動向

オーケストラ界での2024年における特筆すべき動きとして、富士山静岡交響楽団と中部フィルハーモニー管弦楽団の2団体が日本オーケ

ストラ連盟（オケ連）の準会員から正会員に昇格したことが挙げられる。もちろん会員としての要件を満たしたことが昇格の理由ではあるが、実際にこの2団体の近年の活動はめざましいものがあり、演奏レベルの向上も著しい。また編成や給与形態の点で要件を満たしていないためオケ連の準会員にとどまっている神戸室内管弦楽団や愛知室内オーケストラも、その活動内容自体はチャレンジングなものがあり、こうした新たに台頭してきた楽団が日本のオーケストラ界の活性化に寄与していることは注目されよう。またファビオ・ルイーゴとNHK交響楽団、セバスティアン・ヴァイグレと読売日本交響楽団、チョン・ミョンフンおよびアンドレア・パッティストーニと東京フィルハーモニー交響楽団、ジョナサン・ノットと東京交響楽団など、外国の超一流シェフとの揺るぎない関係のもとで充実した発展をみせている楽団もあれば、カーチュン・ウォンと日本フィルハーモニー交響楽団、沖澤のどかと京都市交響楽団、太田弦と九州交響楽団のように優秀な若手指揮者によって新しい息吹がもたらされている楽団もあるなど、今の日本のオーケストラ界は多彩な様相をみせている。

来日オケではサイモン・ラトルとバイエルン放送交響楽団が特に高い評価を得た。9月にはロビン・ティチャーティ指揮のロンドン・フィルハーモニー管弦楽団とアントニオ・パッパーノ指揮ロンドン交響楽団の2つのロンドンのオケが来日、どちらもマーラーの交響曲第5番を取り上げて競演となったことが注目される。山田和樹が手兵のモンテカルロ・フィルハーモニー管弦楽団と初来日を果たしたことも大きな話題であった。

オペラの話

オペラのジャンルで侃々諤々の議論を巻き起こしたのが東京二期会のペーター・コンピチュニー演出による《影のない女》で、物語の読み替えとともに音楽そのものを大幅にカット・再構成した過激な改変はオペラのあり方への大きな問題提起となった。対照的だったのがリッカルド・ムーティのイタリア・オペラ・アカデミーによる演奏会形式の《アッティラ》で、ヴェルディ本来の音楽のあり方にどこまでも忠実であろうとする厳しい姿勢による圧倒的な演奏で上演機会の少ないこの作品のすばらしさを再認識させたばかりでなく、そのリハーサルもすべて公開してオペラ作品へのアプローチの仕方を広く伝えた意義は大きい。新国立歌劇場は《夢遊病の女》と《ウィリアム・テル》の高水準の公演で存在感を示し、藤原歌劇団の《ファウスト》は指揮の阿部加奈子の起用が大成功、びわ湖ホールでは新芸術監督の阪哲朗が《ばらの騎士》で見事な成果を収めて同ホールの新たな時代の始まりを印象付けた。また専属の合唱団と室内オーケを擁する神戸文化ホールが初めてオペラ制作に取り組んで《ファルスタッフ》を上演したことも注目される。演奏会形式によるオペラもマレク・ヤノフスキ指揮N響の《トリスタンとイゾルデ》、ヴァイグレ指揮読響の《エレクトラ》、チョン指揮東フィルの《マクベス》、ノット指揮東響の《ばらの騎士》など、優れたものが多かった。

外来オペラでは前述のロイヤル・オペラのほか、久しぶりにメトロポリタン歌劇場の管弦楽団が来日、演奏会形式ながらヤニック・ネゼ＝セガンの指揮による《青ひげの城》で感銘深い演奏を残した。

実り多かった演奏界

内外のソリストたちや室内楽の優れた演奏会は枚挙に暇がないほどだった。生誕150年のシェーンベルクを取り上げたものとしては、東京・春・音楽祭でのフランスのディオティマ弦楽四重奏団による弦楽四重奏曲全曲演奏会が際立ち、またサントリーホール・チェンバーミュージック・ガーデンにおける小菅優プロデュースによる《月に憑かれたピエロ》もアニバーサリー・イヤーにふさわしい名演だった。イザベル・ファウストがジョヴァンニ・アントニーニ指揮イル・ジャルディーノ・アルモニコと共演したモーツァルトのヴァイオリン協奏曲全曲演奏会はソリストとオケの丁々発止のやりとりが生気溢れる音楽を生み出し

ていたし、カメラータ・ベルンを率いたパトリツィア・コパチンスカヤの《死と乙女》も実にアグレッシヴだった。ギドン・クレーメルとマルタ・アルゲリッチはベテランらしい味のあるデュオを披露、すでに若手の域を超えたピアノのチョ・ソンジンは音楽的センスに満ちた演奏で聴衆を魅了し、エヴゲニー・キーシンは成熟味溢れる音楽作りで今の境地を示した。ショパンとスクリャービンと矢代秋雄の前奏曲を一夜で取り上げて独自の世界を作り出したピアノの藤田真央、日本人作曲家の無伴奏チェロ作品ばかりを暗譜で見事に弾きこなした上野通明をはじめ、日本の若手演奏家の活躍は目を見張るものがある。様々なレパートリーを常に練り上げられた演奏で聴かせる葵トリオの活躍ぶりも際立ち、カルテット・インテグラやタレイア・カルテットなど若い弦楽四重奏団の躍進も頼もしいものがあった。

古楽団体の活動で特に目立ったのが結成30周年を迎えた濱田芳通&アントネッロで、モンテヴェルディの《聖母マリアの夕べの祈り》、ヘンデルの《リナルド》、バッハの《口短調ミサ》などで、古楽の再創造ともいえるような闊達自在なノリのよい演奏を披露した。一方鈴木雅明&バッハ・コレギウム・ジャパンは、メンデルスゾーンの《讃歌》やブラームスの《ドイツ・レクイエム》といったロマン派作品で鮮烈な名演を聴かせている。鈴木秀美とオーケストラ・リベラ・クラシカによるベートーヴェンの《第9》もビリオド楽器の響きを生かしたフレッシュな演奏が魅力的だった。関西では延原武春の日本テレマン協会が気を吐いている。

現代音楽のジャンルでも注目すべき公演が多かった。とりわけ大きな話題となったのが神奈川県民ホール制作によるサルヴァトーレ・シャリーノの《ローエン格林》で、女優の橋本愛がこの作品の唯一の登場人物で難役さきまりないエルザ役を見事に演じ、圧倒的な成功を収めている。恒例である東京オペラシティのコンポージアムはマーク＝アンソニー・タネジを招聘、またサントリー・サマーフェスティバルではアーヴィン・アルディッティがプロデュースを務めてアルディッティ四重奏団を中心に様々な作品を取り上げるとともに、テーマ作曲家としてフィリップ・マヌリの作品を特集した。マヌリは東京文化会館が新たに立ち上げたフェスティバル・ランタンポレル（東京文化会館音楽監督の野平一郎のプロデュースによる現代と古典の音楽をクロスさせた音楽祭）にも登場している。また久石譲がステイーヴ・ライヒの《砂漠の音楽》をオリジナル編成版で取り上げたことも特筆されよう。

追悼

小澤征爾の死去（享年88）は音楽界に大きな喪失感をもたらした。若き日に日本を飛び出し、優れた感性と高度なテクニックによるフレッシュな音楽作りによって日本人は西洋音楽を理解できないという当時の欧米における偏見を覆し、日本やアジアの音楽家が国際的に活動する道を拓いたその功績は測り知れないものがある。今でこそ欧米では夥しい数の日本の演奏家が活躍しているが、それも小澤が拓いた道があったからであることは間違いない。同時に彼ほどに国際的な第一線で広範に活動を展開した日本人アーティストがその後いまだに出ていないことも事実で、いかに彼が並外れた人だったことがわかる。近年は病気がちで、特に晩年は指揮活動が出来なくなってしまったが、自ら創設したセイジ・オザワ松本フェスティバルや小澤征爾音楽塾のリハーサルや公演には車椅子で現われ、出演メンバーに「彼がそこにいてくれるだけで音が変わる」と言わしめるほどにその存在感は大きかった。彼の訃報は大新聞各紙のトップ面で報じられたばかりでなく、その後も何度もわたって特集記事が組まれるというクラシック音楽家ではきわめて異例の扱いがなされたが、まさにそのことに彼の功績の大きさが示されているといつてよい。彼は後進の指導にも熱心に取り組んだが、死後に開催された小澤征爾音楽塾の首席指揮者ディエゴ・マテウス指揮による《コジ・ファン・トゥッテ》公演やセイジ・オザワ松本フェスティバルでの首席客演指揮者沖澤のどかが振ったサイト

ウ・キネン・オーケストラ公演には、小澤の精神が確実に次の世代に受け継がれていることがよく現われていた。

作曲家では湯浅譲二（享年94）、間宮芳生（享年95）、篠原眞（享年92）といった20世紀後半以降の音楽の発展に多大な貢献をなした偉大な傑人たちが次々と旅立った。また東京混声合唱団の創立者で、ほぼ70年という長きにわたって日本の合唱界を支え続けた合唱指揮者の田中信昭（享年96）も生涯現役のまま亡くなった。戦後間もない時期から今日に至るまでのわが国の音楽の歴史を築き上げてきた90歳代の巨星たちの死はひとつの時代の終わりを実感させる。

引退

音楽家としての人生は死で終わるとは限らない。前々から2024年いっぱいまで引退すると宣言していた井上道義が12月30日をもって指揮活動に終止符を打った。近年は時に体調を崩しながらも精力的に仕事を続け、2024年は全国のオーケストラを振って回り、各地でさよなら公演を実施、特に秋には東京や地方のホールや劇場が共同で作り上げる全国共同制作オペラ《ラ・ボエーム》を森山開次の演出で実に全国7か所を巡って指揮するなど、ハードなスケジュールをこなしながら、自らの集大成といえる充実した活動を展開した。各地での公演は彼を聴く最後の機会ということもあって完売が続出、あたかも2024年の音楽界が彼を中心に動いているかのようなその活況ぶりは「井上劇場」「道義劇場」ともいわれたが、本人はどこまでも真摯に最後まで自分の音楽を追求し、12月30日サントリーホールでの読響との最終公演（サントリー音楽賞受賞記念演奏会）ではまさに彼の到達した境地を示す名演で有終の美を飾った。こうした形での引退はほとんど前例がない。自身にとって最良の時機にきっぱり音楽人生の幕を引くその生き方は実に潔いものがある。

その他のトピックス

2023年に休刊した音楽之友社の「レコード芸術」誌をオンラインで復活させるクラウドファンディングが目標を達成、2024年10月に「レコード芸術ONLINE」として再始動した。もとの「レコード芸術」に比べるとはるかに情報は少なく、CD評も簡潔であるなど、物足りないという意見が多いが、ウェブという融通の利く媒体ゆえ、今後改善がなされていくと思われる。休刊によってCDの情報が途絶えていただけに、この復活はCD業界にとって朗報だったといえよう。その一方でCD評と同列で配信の評も掲載しているところに時代の流れを感じさせる。

そうした音楽配信として「Apple Music Classical」が日本でのサービスを開始したことも2024年の大きなニュース。すでに登場していたドイツ・グラモフォンの「ステージプラス」や「ナクソス・ミュージック・ライブラリー」など、今や音楽を聴く媒体はCDからウェブへと移り代わりつつある。「Apple Music Classical」の登場はその流れを加速させることになるのだろう。

寺西基之（てらにし・もとゆき）

上智大学文学部卒、成城大学大学院修士課程修了（西洋音楽史専攻）。音楽評論家として執筆活動を行う一方、(公財)東京交響楽団監事、(公財)東京二期会評議員、(公財)アフィニス文化財団理事、(公財)東京オペラシティ文化財団理事、(公財)日本ピアノ教育連盟評議員、(公財)日本交響楽振興財団評議員、日本製鉄音楽賞選考委員などを務める。共訳書に『グラウト/パリスカ 新西洋音楽史』、共著に『ピアノの世界』ほか。